

第16回ISOCSに出席して

理学部 化学科 石井 昭彦

ISOCSとは、International Symposium on the Organic Chemistry of Sulfurの略称で、筆者たちは「イソックス」と発音している。この国際学会は今回で16回を数え、筆者自身としては前回（仏、1992年）に続いて2度目の参加であった。今回のISOCSは7月10日から15日まで、ドイツのMartin-Luther University Halle-Wittenbergのメルゼブルクキャンパスで開催された。登録参加者は30数か国から430名余り、日本からの参加者は約30名で、独、露、仏について第4の勢力であった。埼玉大学からは、中山重蔵教授と筆者、それから、この4月に本学で学位を取得された、黒田昌美博士（富士電機）が参加した（写真1）。

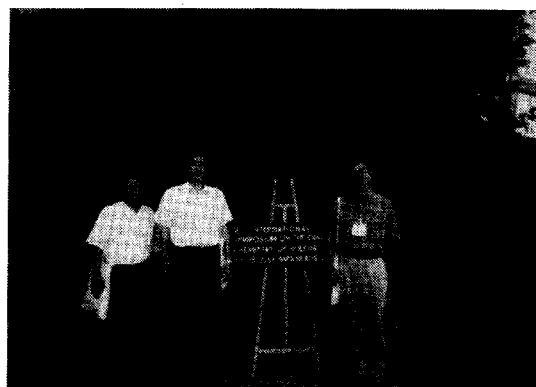


写真 1

メルゼブルク(Merseburg)は、ベルリンに次ぐドイツ東部第2の都市であるライプツィヒの北西約40kmのところの位置するハレ(Halle)という比較的大きな市の隣に位置している旧東側の街である。筆者らの宿泊したホテルは、ハレの駅から徒歩で10分

程のところであり、料金は通常320マルクのところを学会割引でその半額であった。朝、ハレのマルクト広場へ散歩に行くと、そこでは野菜類やハム、ソーセージの朝市が開かれており、某料理番組でおなじみの黄や赤の色鮮やかなピーマンがキロ6マルクほどで売られていた。またここは、ヘンデルの像があることでも有名である。

ホテルから会場へは、主催者側が用意したバス、鉄道、あるいはタクシーを利用しなければならなかった。一度、試しにと鉄道を利用した。ハレ駅からメルゼブルク駅までは10分ほどであったが、駅からキャンパスまでは予想以上に遠く、ほぼ北浦和駅から埼大までと同じくらいの距離を歩き、大汗をかいてしまった。

大汗といえ、今年の夏はヨーロッパでも異常気象で連日30度を超す猛暑であった。わざわざ日本からパーカーを持って行ったが全く必要なかった（2年前のフランスでの快適な夏をもう一度と期待していただけにまことに残念）。また、主催者の用意した送迎バスは比較的新しいにもかかわらずエアコンがない上に窓も開かず、天井からお情け程度に風が入ってくるだけという状態で、脱水状態になるのではないかと真剣に心配する先生もいたほどだった。ただ、夏が暑かった年にはいいワインができるそうなので1994という数字を記憶しておきたい。

さて、本学会は、その名の通り、硫黄の有機化学に関する学会であるが、1) 有機硫黄化合物の合成、2) 有機硫黄化学の理論、スペクトル、反応機構、立体化学、3) 硫黄を含む環状化合物、4) 硫黄の生化学、5) 有機硫黄化合物を基にした機能性化合物、の5つのセクションに分かれて一般の口頭及びポスターセッションによる発表が行なわれた。Plenary Lectureはメイン会場で行われたが、意外なことに講演終了後の質疑応答がなかった。後で聞いたところでは、これが東側の流儀だそうである。筆者は、主に、セクション1、2、3の会場に張り付いていた。筆者自身の発表はセクション3において行

われた。聴衆は30~40人といったところであろうか。会場が100人は入ろうかという階段教室であったにもかかわらず、マイクなしの発表であった。当然、質疑応答もマイクなしであったので質問を聞き取るのに苦労してしまい、座長のムロストーン教授にぜひぶん助けていただいた。後日、休憩時間に教室の演壇をもう一度見に行ったところ、そこには簡単な実験設備があり、ずらりと並んだガス栓やいかにもごっつい感じの電源部には、創立300年のハレ大学の歴史を感じさせるものがあった(写真2)。



写真 2

ところで、ドイツ車と言えば筆者にとってはまだまだ高嶺の花であるけれども、当然のことながらドイツにはドイツ車が多い。もちろん、日本車やフランス車も結構走っている。途中立ち寄ったフランクフルトやハンブルクでは、おそらくドイツ人にとっても高級車であろうメルセデスやBMWが決して珍



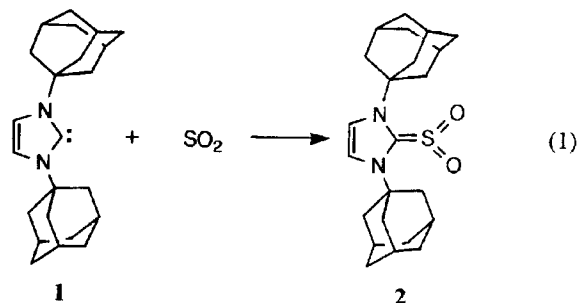
写真 3

しくない、ドイツという国の豊かさを感じた。ところが、旧東側にはいると様相が一変する。ドイツ車といっても小型車やかなり年季の入った車が多いし、何といても目を引いたのは、名前は忘れてしまったが旧東ドイツの国産車である。昼休みの時間に大学の駐車場に停めてあった一台を記念にと写真に収めてきた(写真3中央)。

今回の学会では、Plenary Lectureよりも、どちらかというと一般発表の中に興味深い講演が多かったように思う。Plenary Lectureについては、講演

者の出身国のバランスに気を使いすぎたためか、研究のレベルとしてはあまり高くないものがいくつかあった(これは、筆者だけの意見ではありません)。

筆者にとって、特に目を引いたのは、スルフェン(一般式、 $PR'C=SO_2$ で表される化学種)の合成に関するウクライナの研究者によるポスター発表であった(式1)。出発物1は安定カルベンとして他の研究者により合成されたものであるが、1と二酸化硫黄の反応によってスルフェン2が合成され、X線結晶構造解析までなされていた。筆者の知る限りにおいて、スルフェンに関してここまで研究がなされたのは初めてのことである。集大成的な発表や、すでに学術誌に発表済みの内容の講演が多いなかで特に衝撃的であった。



次回17th ISOCSは、1996年に筑波で開かれる。

東京大学の岡崎廉治教授がChairman、筑波大学の古川尚道教授がVice-Chairmanをつとめられ、本学の中山重蔵先生も組織委員会の一員になられている。この学会が、日本で開かれるのは初めてであり、次回ISOCSの成功を心よりお祈りする次第である。